

# 日本山岳会 越後支部報

## 第 18 号

平成29年2月15日  
発行 公益社団法人日本山岳会越後支部  
発行者 遠藤 家之進正和  
新潟県新潟市南区鷺ノ木新田1049  
TEL・FAX 025-362-5004  
広報委員長 本間 一人



### 私の一枚

#### 杓差岳（えぶりさしだけ）

毎年6月の上旬に、ハクサンイチゲを見に飯豊へ登ります。天候に恵まれれば、咲き初めのハクサンイチゲと、たおやかな飯豊連峰の景観が楽しめます。この一枚は頼母木山から撮影したものです。ここからの杓差岳が一番好きです。

鈴木 勝利

## 新年を迎えて

支部長 遠藤 家之進正和

明けましておめでとうございます。会員各位におかれましては、羽ばたく干支の新年を迎えお慶び申し上げます。

になりました。

会員の皆さんにあっても、登山に興味を持つていられる方を知っておりましたら、越後支部に入会を勧めてください。

昨年は、創立七〇周年記念事業をはじめ全国支部懇談会を担当し、大変の年でした。多くの方から御協力いただき無事終了できました。御礼申し上げます。

山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝することで、八月十一日が「山の日」として国民の祝日に制定されました。昨年からは親子登山を実施しましたが、案内不足から参加者が少数でした。

これは支部会員結束の賜物であり、八十周年、百周年に向けて活力ある活動に結びつけていきたいと考えております。

自然に触れ、登山の喜びを味わい、次世代を担っていただく、若い親子に参加してもらえよう今年、関係役員を中心に検討を重ね案内する予定にしておりますので、近隣で参加希望者がありましたら、大いに参加を勧めてくださいようお願いいたします。

日本山岳会も会員数の減少傾向が激しく、会員増に向けての検討がなされ、この度、「準会員制度」を整備しました。本来なら正会員の加入がありがたいのですが、金銭的問題、入会後のメリット等から入会を躊躇されているという声もあり、会費等を軽減して、三年後に正会員に移行するという制度です。

加えて会員同士の交流を図るため「靴音・よりあいの集い」の山行を予定していますので多くの参加をお待ちしています。

越後支部は、歴史ある支部ですが会員も高齢化となり、近時は活動も停滞化の様相でした。このままでは、衰退する危機感から支部の活性化を図るキャチフレーズに集會委員会を設けて活動をはじめました。さらに、若返りをしなければ若い新入会員の勧誘に努めています。この「準会員制度」を活用して会員の勧誘を推進すること

図書委員会から「越後山岳」第十三号の原稿募集案内が発送されました。十二月発行を目指して、五月末日の締切りとなっています。内容を充実したいと思っておりますので、多くの会員からの応募をお願いします。今年も多くの行事を予定していますが会員の協力で、安全に遂行できることを願って新年の挨拶とします。

平成二十八年年度

### 中部ブロック四支部交流会

(担当：信濃支部)

開催地：長野県木曾郡木曾町

平成二十八年度の中部ブロック四支部

(越後・信濃・山梨・静岡) 交流会は十月

一日〜二日長野県で開催され、遠藤支部長

以下十二名で参加した。

前日の三十日、車三台に分乗し梓川SA

で合流、夕食の買い出しを済ませ、桐生副

支部長の案内でまず名勝三本滝や善五郎の

滝を見学し、白骨温泉の野展望風呂につか

り紅葉を堪能した。

この日の泊りは、桐生さんが、山仲間と

建設した別荘「入山山荘」だ。

山荘は、梓湖を見下ろす絶好のロケー

ションにあり、二階建てで豪華な囲炉裏や

薪ストーブもある立派なもの。

手慣れた男性が鍋料理を作り、持参した

ビールでまず乾杯。その後、お酒、ワイン

と進み夜が更けていきました。

翌日、田邊信行さんの「オカリナ」演奏

に耳を傾けたり、山荘に置かれた山の資料

を見たりしてゆっくり過ごし、十一時に今

回の会場長野県木曾町のおん宿「葛屋」へ

向かった。

授 竹下欣宏氏の「火山と向き合って暮らす」(御嶽山と共に)と題する講演会があり、その後、会場を「葛屋」に移し交流会となりました。越後十二名、信濃三十四名、山梨八名、静岡十三名、計六十七名の参加で、各支部の人達と賑やかに語り、踊り、有意義な交流会でした。

翌二日の交流登山は慰霊登山として「御嶽山」で行われた。「御嶽山」は三年前の九月大噴火を起こし、多くの登山者が犠牲になった。しかし、現在は沈静化の方向にあり、平成二十八年六月、九合目上部(分岐)まで規制が緩和されて登ることができるようになった。しかし、観光産業は噴火前に比べて著しく沈滞しているという。

今回は、八合目女人堂と九合目上部の二手に分かれて登ることにした。

ゴンドラに乗り黒沢口から登る。行場山荘を過ぎ、樹林帯を登ると視界が開け八合目女人堂に到着する。時折、雲の間から山頂を望むことができる。ここで献花をし犠牲者の冥福を祈った。

その先の斜面の紅葉は本当に素晴らしかった。あの日もこの紅葉を見ながら山頂に向かったに違いない。登山道は次第にガレ場の急斜面になり、九合目石室山荘(営業中)に着く。登山道の岩の隙間には火山

灰が積もり、周りには頭が欠けた石碑が多く見られ、噴火の凄まじさが想像できた。

山荘の上の分岐まで更に登り、遮るものが何もない道をトラバースし、乳白色になった二ノ池まで足を延ばした。

(佐藤レイ子)

.....

### 日本三百名山二十一座 踏破の報告

副支部長 桐生 恒治

越後支部創立七〇周年記念事業として、「日本三百名山越後支部執筆二十一座踏破」の計画を無事終了することができました。ご協力いただいた多数の支部会員皆様にお礼申し上げます。

昨年三月二十七日浅草岳登頂を皮切りに、最終の十一月三日御神楽岳まで二十座の登頂を成し遂げました。残念ながら七月十七日に予定していた焼山は、噴火警戒規制により入山禁止となったため中止せざるを得ませんでした。

昨年十二月十日の越後支部年次晩餐会記念式典講演会で、各登山隊が撮影した登頂写真や登山風景の写真を七十一枚のスラ

イドにまとめました。スライドタイトル「越後の鈍と根」は、創立二〇周年の県境全踏査縦走を成功させた時に、故深田久弥氏が越後支部を評した言葉を引用しました。そのスライド上映をしながらリーダーの方々から登頂報告をおこなっていただきました。なお、正式な報告書は、本年十二月に発行予定の「越後山岳第十三号」に掲載するつもりです。

日本山岳会会報「山」二〇一七年一月号

〜支部だより〜にも掲載しましたが、登山実施順にチーフリーダーと支部参加者数は次の通りです。①三月二十七日浅草岳(桐生恒治) 支部参加者八名、②四月二十四日二王子岳(高橋正英) 支部参加者六名、③五月十五日金北山(藤井与嗣明) 支部参加者十五名、④五月二十二日守門岳(浅野亘寛) 支部参加者六名、⑤五月二十九日米山(後藤正弘) 支部参加者三十六名、⑥六月



五日粟ヶ岳（遠藤俊一）支部参加者八名、  
 ⑦六月十九日巻機山（宮崎幸司）支部参加者九名、  
 ⑧六月二十五日佐武流山（佐藤レイ子）支部参加者九名、  
 ⑨七月二日火打山（七澤恭四郎）支部参加者六名、  
 ⑩七月三日妙高山（七澤恭四郎）支部参加者六名、  
 ⑪七月十日机差岳（石山政雄）支部参加者十名、  
 ⑫七月十七日焼山（鶴本修一）中止、  
 ⑬七月二十五日苗場山（小山一夫）支部参加者六名、  
 ⑭八月二十一日平ヶ岳（櫻井昭吉）支部参加者十四名、  
 ⑮八月二十八日越後駒ヶ岳（楡井利幸）支部参加者十三名、  
 ⑯九月十一日八海山（吉田理一）支部参加者九名、  
 ⑰九月二十六日中ノ岳（和田守）支部参加者七名、  
 ⑱十月二日鳥甲山（宮崎幸司）支部参加者六名、  
 ⑲十月十三日雨飾山（後藤正弘）支部参加者七名、  
 ⑳十月二十二日青海黒姫山（後藤正弘）支部参加者九名、  
 ㉑十一月三日御神楽岳（阿部信一）支部参加者十名でした。支部会員の登山参加延べ人数は二〇〇名、オープン参加及び公募登山参加のメンバーは合計九十三名と多数の方々が登山を楽しまれたと思っております。最多登頂者には、遠藤支部長より記念品贈呈が行われましたが、男性の部で一位遠藤俊一氏（十六座）、二位石山政雄氏（十二座）、三位田邊信行氏（九座）。また女性の部で一位根津洋子さんと滝沢信子さん（十座）、三位井口礼子さん（八座）でした。

この二十一座登山は、越後支部創設者の藤島玄初代支部長の「越後の山を登り理解する」思想を踏まえ、多くの支部会員が「越後の山を改めて深く学び経験する」とができたと思います。各登山隊のリーダーの方々が、明確に役割分担し参加者と綿密な連絡を取り合い、支部会員間の交流が活発化したと確信しております。リーダーに「JAC&越後支部ペナント」を配布し、登頂時にペナントを持って記念写真の撮影を依頼しました。配布ペナントがモチベーションを高め、登山計画立案や参加者募集を含め精力的に行動していただいたと思います。リーダーの支部会員は六十〜七十歳代であり、参加者も同年代が多かったことは否めない事実です。安全登山を最優先に取り組み無事故で終了し、健康登山と言う観点で支部活動を行うことができました。

今回の計画は、実際に山に登ることで魅力ある有意義な活動であったと考えます。支部活性化の具体策は、みんなで山に登ることが原則で、まず会員が支部活動に参加して興味を持つことです。越後支部会員の

連帯感を、他の山仲間にも伝えることにより新規会員の発掘につながりたいと思います。楽しく健康に登山することにより、会員同士つながりの輪を広げて、新規会員の勧誘も積極的に試みて行きたいと考えます。



七〇周年記念登山二十座踏破

さすが越後支部の鈍と根

実行委員長 山崎 幸和

当支部の創立は昭和二十一年十二月五日で、その創立七〇周年を迎えた平成二十八年十二月十日の支部晩餐会は記念祝賀会と併催、出席会員で喜びを分かち合った。そして九ヶ月間に亘って二十座登頂の記念登山の報告が、桐生恒治副支部長及び出席二十一座担当者（焼山噴火規制中止）から為された（詳細は会報『山』二十九年一月号参照）。

○過去の支部記念登山は六回実施された。  
 ・支部創立記念 昭和二十二年六月 苗場山  
 ・二〇周年 昭和四十一年三月〜六月 県境全踏査  
 ・三〇周年 昭和五十一年六月 苗場山  
 ・四〇周年 昭和六十一年十月 猪ヶ森山  
 ・五〇周年 平成八年九月 越後駒ヶ岳  
 ・六〇周年 平成十八年九月 平ヶ岳

「越後衆の鈍と根」と称し「こんな途方もないことを思いつくのが越後衆の鈍なら、それを本気になって実行したのは越後衆の根だろう。越後支部には強靱な団結と融和の底力というより糞力があつた。多年の友情と信頼が反応したのである」と。  
 もうこの様な規模と感動の再現は不可能であるが、七〇周年はせめて多数の参加会員と話題に残る記念登山をと望み「三百名山の内二十一座登頂」という奇想を実行す

私はこの内、二〇周年から六〇周年までの五回参加してきたが、今でも強烈な想い出が残っているのは五十年前の二〇周年記念「県境全踏査縦走」である。全長六八七キロの県境担当区間を会員約七十名が主となって県内岳人五七一名が三ヶ月間に亘り踏破したのであつた。



ることとなった。二十一座は越後支部が執筆担当した座敷で、各々担当の会員各位には登山計画とリーダーの大役を担って頂き深甚なる感謝を申し上げたい。そして実行委員には桐生恒治、遠藤俊一、小山一夫、遠山実各会員が任命され、二十一座担当者の準備と登山遂行関係の処理に尽力頂いた。おかげで悪天延期なく無事故で、しかも参加会員は延べ二〇〇名に達するという大成功裏の内に終了でき、祝賀会で感激を新たにしたのである。

日本山岳会越後支部七〇周年記念二十一座登山  
**佐武流山（苗場山）佐武流山縦走**  
**登山報告書**

報告者 **佐藤レイ子**

**一日時**

平成二十八年六月二十四日(金)～二十五日(土)

**二 参加者**

C.L. 佐藤レイ子 S.L. 桐生恒治  
遠藤俊一、根津洋子、高橋初代、  
滝沢信子、井口光利、井口礼子、  
成海 修(日帰り)、戸貝美枝子(会員外)

合計 十名

**三 コースタイム**

二十四日(金) 苗場山小赤沢三合目登山口発  
10:00ー(途中昼食)ー赤倉山分岐13:00  
ー苗場山頂13:30(泊)  
二十五日(土) 宿発4:30ー苗場神社5:00  
ー(途中朝食)ー赤倉山7:10ーナラズ山  
9:00ー土舞台10:00ー分岐11:00ー佐武  
流山山頂12:00ー10ー分岐13:00ー20ーワ  
ルサ峰13:50ー物思平15:00ー渡渉点15:  
35ー50ー登山口17:15ー車回収解散18:30  
**四 概要・記録**

何といっても一番の気かりは天気だった。九州地方では大規模な被害の出ている梅雨のこの時期、毎日、猫の目のように変

わる天気予報に何とか大雨だけは降らないでほしいと願っていたのが通じたのか、二日間ともほとんど雨具を着ることなく、登山道の整備されていない長丁場の尾根を、健脚の皆様の協力が無事縦走し佐武流山に登頂しました。



し小休止。ペットボトルに汲んだ水は茶色に濁っていた。途中で先に出発したグループを追い抜き、緩やかだった登山道は次第に傾斜を増し、所々鎖のある岩場になる。六合目の水場はチョロチョロとしか出ていなかった。その先見晴しの良い所で昼食を取る。登山道脇にはゴゼンタチバナ、ミツバオウレン、マイヅルソウ、イワカガミなどが咲いていて目を楽ませてくれる。

八合目で展望が一気に開け、池塘が点にする木道の敷かれた高層湿原に出る。ヒメシヤクナゲやタテヤマリンドウが咲き、ワタスケが白い穂をなびかせていた。正面には明日登る佐武流山が遠くに望め、振り返れば鳥甲山、更に横手山や岩菅山……と周りの山々が鮮明に展開している。

その後オオシラビソなどの樹林帯に入り、再び湿原に出る。チングルマもまだ残っていた。苗場山の山頂部は平坦で広く大小無数の池塘が点在している。

この日の宿泊は山頂の「苗場山自然体験交流センター」だ。山頂は隣の今は無き「遊仙閣」の後ろで、一等三角点がある。バナントを掲げ記念撮影をした。

その後、宿に入ると同時に雨が降り始め、明日の天候を祈りつつ乾杯する。宿は私達の他に二パーティで、ゆったりと使うこと

ができた。食事はおかわり自由のカレー、ポテトサラダ、ラッキョウなどで美味しかった。

明日は早いので早めに就寝したが、窓を揺らす激しい風の音で目が覚め、外をのぞくと暴風雨状態だ。気になってなかなか寝付かれず、何とか朝までに収まってくれなしかと願う。

二十五日(土)午前三時半、他のパーティの邪魔にならないよう静かに起きて支度をし、四時半、雨具を着けて出発だ。風は夜中より若干弱くなり、雨も小降りになってきた。

昨日来た木道を戻り、赤倉山分岐で左へ曲がり、更に木道を下る。木道が切れると所々水たまりがあり避けながら進む。登山道脇にはゴゼンタチバナ、ミツバオウレンが満開だ。

左に苗場神社を見送り、途中、井口さんから旧登山道があった場所と石碑を教えてもらった。一時間ほどで雨は上がり、その代りブユの大群が顔にまとわりつき大変だ。赤倉山手前で朝食タイムを取り、標高差二〇〇メートルを登ると赤倉山山頂だ。オシラビソやコメツガの木で見晴しは良くなく、左へ赤湯に至る登山道があるが、あまり人が歩かれていない様子だった。

ここからいよいよ今回のハイライト「藪」に突入だ。足元を見ると僅かに踏み跡らしきものはあるものの、背丈ほどの笹藪に完全に覆われ、漕ぎ分けて進まなければならぬ。跳ね返った笹が平手打ちのように顔に当たり、足元の倒木や笹の根や水たまりが見えないから更に厄介だ。時々、しりもちについて悲鳴が上がる。それでも、へつり道になると、展望が開け、雲海に浮かぶ平標山、越後三山方面を望むことができた。



反面、斜めになった足元は土砂が流れ草が浮き不安定で、某氏は三メートルほど斜面の草藪に転げ落ちヒヤッとしました。

笹藪を漕ぎながらのアップダウンは疲れも二倍。熊はぎにされた木も点在していた。しかも真新しい。ナラズ山の山頂に到達して一息入れる。山頂は狭く笹藪とオオシラビソに囲まれ、一九八〇年の古い看板があった。



ナラズ山の下りの藪が一番ひどく、一瞬ルートを見失ったが、軌道修正し三〇〇メートルほど進むと刈り払いされた道にひよっこり出た。でも、その道も笹が再生し始め、いずれ藪に戻ってしまうのは必至だ。最低鞍部が「土舞台」で広場になっていた。刈り払いされた所は、やはり歩き易

く有難い。

ここから佐武流山までは長い登りが待っている。疲れた体には堪える。参加された皆さんは全員健脚で黙々と登り続ける。整備された中津川林道から佐武流山に登る登山道に合流する分岐までの登りが急で一番大変だった。

分岐に荷物をデポし、空身で山頂へ向かう。坊主平を経て一時間ほど緩やかに登ると山頂に到着する。中津川林道から登って来た成海さんが既に到着していた。今日は我々の他に誰も登っていなかった。十数年前、ルートができて最近人が来るようになったものの、この山は、以前は本当に秘境の山だった。あれだけ探しても見つけれなかった三角点がちゃんと顔を出していた。山頂でペナントを掲げ記念写真を撮り、分岐まで戻り昼食を取った。

下山も時間がかかるのでゆっくりしてられない。岩場まじりの小ピークをアップダウンし、立ち枯れのあるワルサ峰に着く。右手には今朝から縦走してきた苗場山から赤倉山、ナラズ山が大パノラマとなって望むことができ感慨深い。

その後も岩や木の根で歩き辛い痩せ尾根が続く。ロープも何箇所か設置されていて急峻だ。木の根元に偶然ヒカリゴケを発見



した。急な斜面をジグザグに下ると、「物更に急な斜面を下ると、沢の音が次第に大きくなり、渡渉点に出る。五〜六メートルの沢は雨で若干水量も増し流れも速い。渡してあるロープにつかまりながら成海さんのサポートで全員無事に渡り終える。車回りの五人は先に出発し、残りの人はその後、林道を延々と歩いてドロノ木平登山口へ向かった。

## 事務局連絡

すべての活動を会員拡大へつなげよう。

日本山岳会の最大の課題は、会員減少に歯止めをかけ組織・財政を立て直すことにあります。日本山岳会再生委員会による分析・提言を受けて、ここ数年取り組みを強化してきました。全国的には新入会員が五年連続二〇〇人を超えていますが、まだ会員減少は続いています。

越後支部会員の平均年齢は七三歳と全国平均より五歳高く高齢化が進んでいます。今後、会員の減少が加速されることを危惧しています。すべての活動を会員拡大につながるよう活動を強めようと考えています。このような厳しい現状を支部全体で共有し、新入会員勧誘にご協力お願いいたします。支部事務局へ問い合わせいただけます。パンフレット」及び「入会申込書」を送付します。是非、お声かけ下さい。なお、「入会申込書」は日本山岳会ホームページからもプリントできます。

## 『越後山岳』十三号原稿募集中

越後支部創立七〇周年を記念して、『越後山岳』十三号を発行します。すでに詳細について会員の皆様にご案内をしています。が、ふるってご応募ください。

登山記録・山行紀行・随想・地域研究・人物研究・山の動植物研究・山の詩、短歌、俳句など、文字数は八千字程度、原稿締め切りは五月三十一日です。

## 支部会員動向

(二〇一六年六月〜十二月)

### 一 物故会員

飯田 武夫(八二五七)

新潟市西区 死亡日不明

### 二 退会者

青木 司(一三三五二)

二〇一六年十一月

小林 厚子(二四八六六) 手続き中

### 三 新入会員

田辺 忠史(申請中)

### 四 支部会員総数

(二〇一六年十二月二十五日現在)

一九八名

## 編集後記

本間 一人

何もしない支部とは遠い昔のこと、かつては県境縦走という大変な事業もやりとげた。そのときのホウロウビキの菱形の票識が昨年眼にした。偉大な記録と共に当時の記憶が蘇った。昨年の二十一座の記録も支部として語りつがれるものと思う。その思いを載せていただいた。今後、越後山岳にもまとめられることだろうが、投稿いただいた物をまずは一読願いたい。

